

みのる法律事務所
第 3 0 5 号
平成 2 7 年 9 月

みのる法律事務所
弁護士 千田 實
〒 021-0853



岩手県一関市字相去 57 番地 5

TEL : 0191-23-8960

FAX : 0191-23-8950



みのる法律事務所 <http://www.minoru-law.com/> [✉ minoru@minoru-law.com](mailto:minoru@minoru-law.com)

ほんの少し欲を捨てるだけで、 幸せになれる



「仏教は、ほんの少し欲望を捨てるだけで、わたしたちはすぐさま幸せになれると教えています。すなわち、『しょうよくちそく少欲知足』です。欲を少なくし、足るを知る心を持つ。そうすればわれわれは真の幸福を得ることができるのです」

これは、宗教評論家のひろさちや先生（1936-）が、その著書『ほっとする仏教の言葉 —捨てるで生きる』（発行所 株式会社二玄社、初版発行日 2011 年 2 月 25 日）の「あとがき」で述べているものです。

『大震災・巨大津波をよ詠む —5年後の再発行』の原稿を書いている現在、これまで以上に深い共鳴を覚えています。「ほんの少し欲を捨てるだけで、絶大な効果が生まれる」という印象が、かつてないほど身に染みてきました。

今回は、「ほんの少し欲を捨てる」ことで、「個人及び社会に絶大な好影響を与える」という事例を紹介します。「ほんの少し」でいいのです。「欲望を捨てる」だけで、人生が、人類が、国が、地球がよくなるのです。

「欲望」とは、「不足を感じて、それを満足させようと望む心」（角川必携国語辞典）です。「欲」とは、「ほしがる。したがる」（前同）ということです。仏教では、「心身をなやますいっさいの欲望」を「ほんのう煩惱」と言っています。

この「欲望」、「欲」、「煩惱」は、生きている間はなくなりません。逆に言えば、これが全くなくなるということは「死」を意味します。どんなに修行しても、生きている限りこれを全くなくすことはできません。

黄色い本、青い本、さくら色の本、ピンクの本等、「いなべんの本」は株式会社エムジェエムの他、下記書店でも好評発売中です。

宮脇書店気仙沼本郷店 〒988-0042 気仙沼市本郷 7-8 TEL: 0226-21-4800
[amazon.co.jp](http://www.amazon.co.jp/) <http://www.amazon.co.jp/>



ですが、コントロールすることはできます。ある欲望を少なくしたり、捨てることはできます。欲望の性質、内容によっては、完全に捨てることもできます。

「茶断ち^{ちやだ}」のように、神仏などに願掛けをする時、「ある期間または一生茶を飲まない^{ちか}」と誓うことがあり、それを実行することはできます。欲は、一部なら捨てたり少なくしたりはできます。ですから、「ほんの少し欲を捨てる」ことは、それほど難しいことではありません。

その欲をほんの少し捨てるだけで、その人の人生を、その国の運命を変えるほど絶大な効果を生むことがあることに、最近気がつきました。

捨てる欲はほんの少しなのに、それによって絶大な好効果が生まれることに気づきました。捨てるものとそれによって得るものとの差が、これほど大きく違うことを改めて知り、黙^{だま}っていられなくなりました。身近な具体的事例を挙げて説明してみます。

最近、若い女性が自動車を運転中にセンターラインを超え、対向してきた大型トラックと正面衝突し、即死するという事故を何件か見聞きしました。

まだ二十歳前後の娘さんです。これから本当の人生が始まるという年齢で、人生の幕を下ろしたのです。その原因は、「運転中に携帯電話を操作していて、一瞬前方を見ていなかった」というものでした。「自動車の運転中は、前方から目を離さなければならない欲は捨てる」ということは鉄則です。運転中は、前方から目を離さなければならない欲は、捨てなければなりません。その欲を捨てられない場合、一時運転する欲を捨てなければなりません。

鉄の塊^{かたまり}である自動車が時速60 km くらいのスピードで走り、人にぶつかったら、人はひとたまりもありません。走る自動車は、歩行者にとっては凶器です。

前にも後ろにも、同じように凶器が走っています。少し気を抜いたら、衝突したり、衝突されたりします。運転者にとっても、自動車は凶器となります。

のみならず、センターライン1本で区切られた対向車線からは、こちらの自動車に向かって同じようなスピードで凶器が近づいてきます。目を瞑^{つぶ}りたくな





るような光景です。

これと正面衝突したら、双方ともスピードが出ているのですから、大変な衝撃があることは容易にわかります。軽自動車が大型トラックと正面衝突したら、軽自動車の運転者が即死する危険性は極めて高くなります。自動車の運転は、まさに「命の綱渡り」です。

本当は、このような危険は全面的に回避したいところです。自動車の走行を全面的に禁止すれば、交通事故は起きません。

ですが、「クルマ社会」と言われる現在、自動車の運転をやめては生活が成り立ちません。法律も、自動車の運転を「許された危険」などと言って、運転免許証の取得など一定の条件をつけて許しています。自動車の運転が危険であることは、交通事故の死傷者数が年間約71万人（平成26年）に及んでいることから、はっきりしています。このような危険な行為をする場合は注意が必要であることは、言うまでもありません。その注意は、大きな注意というよりも、小さな注意です。ほんの少しの注意の有無が大きな結果を招くことになります。

運転免許証を取得して最初のうちは、前方をじっと見て運転するのですが、1、2年経って慣れてきた頃になりますと、携帯電話を使いながら運転したり、スマホを操作しながら運転する若い女性も出てきます。自動車の運転は極めて危険な行為であることを、慣れるに従って忘れてしまうのです。

「運転したがる欲望」だけでは足りず、運転しながら「携帯電話をかけたい欲望」とか、「スマホを操作したい欲望」が湧いてくるのです。欲はどこまでも湧いてきます。

「運転したい欲望」と「電話したい欲望」、「スマホを操作したい欲望」のどちらの欲望も同時に満足させようとした結果、「即死」という決定的な事故を起こすのです。

臨死体験をし、あの世はこの世と違って欲のない^{おだ}穏やかな世界であることを





知った身としては、死んだ人を気の毒だとは思いません。ですが、このような死に方は、残された人には絶望的な影響を与えます。娘を亡くした親の心を思うと、母を亡くした子供の将来を思うと、胸が締めつけられます。そのような事故は、絶対にあってほしくありません。

このような事故は、ほんの少し欲を捨てるだけで避けられるのです。ほんの少し欲を捨てるだけで、絶大な効果があるのです。「ほんの少し欲を捨てるだけで幸せになれる」という一例として、自動車を運転している間は、「携帯電話をかけたい」、「スマホを操作したい」という欲は捨てるべきだということを申し上げたいのです。

自動車を運転している間だけは、「携帯電話は使わない」、「スマホは操作しない」と、ほんの少し欲を捨てていれば、「死亡事故」という個人にとって最も重大な不幸は起きなかったはずだということを申し上げたいのです。

どうしても今すぐ携帯電話を使わなければならなかったり、スマホを操作しなければならぬのなら、自動車を適当な場所に停車させてからやればいいのです。「自動車の運転を続けたい」という欲望を、一時ストップするだけでいいのです。

これは、「自動車の運転を続けたい」という欲望と、「今すぐ携帯電話をかけたい」という欲望のうち、どちらかをほんの少し捨てるだけで問題は解消します。

今すぐやりたいということを、ほんの数分遅らせるだけで済むことなのです。

これは、「欲を捨てる」などとも言えないほど、捨てる欲はわずかな欲なのです。「今やりたい」という欲望のどちらか一方を、1分、2分抑えればいいだけなのです。一方を、1分、2分後にするだけで解決するのです。

「今すぐやりたい」という、ごくごくわずかな欲のどちらも捨てられずに、起こしてしまった結果のあまりの大きさに驚いてしまいます。ですが、どんなに悔やんだって、死んだら生き返れないのです。



死んだ本人は気づかないでしょうが、大切な人を失った身としては、悔やんでも悔やみきれない悔し^{くや}しさです。「ほんの少し欲を捨てるだけで、周囲の人々の幸せを奪わないで済むという絶大な好効果が生まれる」という例を、個人について挙げればこういうことなのです。

事例を、個人から国家規模の話に移しましょう。「少し欲を捨てるだけで、人々の幸福を奪うことなく幸せになれる」という代表例は、「原発廃止」です。「原発は、国民1人1人がほんの少し欲を捨てるだけで廃止できる」のです。

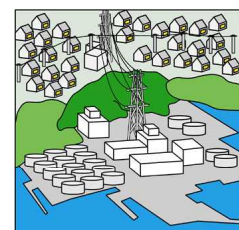
原発は、国民1人1人が、ほんの少し「金」と「便利」と「快樂」という欲を捨てれば、不要となるのです。あんな危険な化け物を使わなくてもよくなるのです。

原発が危険であることは、福島原発事故によって日本人は十分に知りました。原発は、コントロールができなくなった「鉄人28号」です。人間の力ではどうすることもできないのです。多くの日本人は、原発の再稼働に反対しています。しかし、安倍政権は多数の国民の反対を無視して、原発の再稼働に踏み切りました。安倍政権の理由付けは、「原発は安く上がる」という1点にあります。

このような安倍政権に問題があることは間違いありません。それを阻止できなかった国会にも責任があります。そして、そのような国会議員を選び、国政の場に送り出した国民に最終的な責任があります。

「なぜ、そんなことをしてしまったのか」ですが、それは国民1人1人の心の底に、「金」と「便利」と「快樂」をどこまでも追求していく欲望があるからです。その欲望をほんの少し捨てれば、「金」と「便利」と「快樂」を追求して止まない政治家など、選ばないはずです。

「原発再稼働」に対しては、国民の多くは反対しています。ですが、安倍政権をはじめとする政治家の先生方は勿論ですが、国民の中にも賛成している人はいます。「安保問題、原発問題には反対だが、経済政策重視で景気が上向き



になりそうだから」という理由で、安倍政権を支持している国民が多いことは事実です。国民1人1人が少し経済的欲望を減らして、子や孫の世代の幸せを考えてほしいのです。

「原発は、火をつけることはできるが、消すことはできない化け物」なのです。「原発は、火をつけるだけでなく、消すこともできる」と強弁する方もいるでしょうが、本当に原発の火は安全に消せるのでしょうか。

東京電力株式会社によれば、事故が起こった福島第一原発を「廃炉」にするためには今後30～40年かかるとのこと。東電や国の概算によると、福島原発事故の賠償額はすでに5.4兆円を上回っており、廃炉・汚染水対策にかかる約2兆円を含めると、少なくとも約11兆円規模になる見通しとのこと。

仮に、年月と費用をかけて廃炉にできたとしても、その後に残る使用済み核燃料はどうなるのでしょうか。いつ、どこへ、どのようにして完全に処分するのでしょうか。本当に安全に処分できるのでしょうか。

大気中に大量に放出され、地面などに沈着した放射性物質の除染作業が各地で進められていますが、それらはいつになったら完全に除去できるのでしょうか。いわゆる汚染水の浄化は、きちんとなされているのでしょうか。いったい何年経ったら、元の安全な環境へ戻るのでしょうか。核について全く素人である身としては不安でなりません。



私は、「消せない火はつけない」ということは鉄則だと確信しています。「消せない火をつけたい」という欲は、捨てなければならないのです。

3～4歳児でも、チャッカマンを使えば火はつけられます。しかし、3～4歳児では、消火はできません。ですから、3～4歳児には、子供がどんなにせがんでもチャッカマンを使わせてはならないのです。

台風の日には、野焼きや山焼きは止めます。燃え広がったら消火が難しくなります。山火事などになりかねないのです。火をつけた人の力では消火できな





くなるから、火をつけないのです。

「今日中に野焼きや山焼きを終わらせたい」という欲があっても、一時その欲を抑えて日和を待つべきです。1日、2日先に延ばすだけです。ほんの少し欲をコントロールするだけです。

原発は、仮に安倍政権などが主張するように経済性は高いとしても（これにも問題はありそうです）、福島原発事故が物語っているように、一度原発を稼働させたら東京電力株式会社の力だけでは簡単に廃炉にすることはできません。

安倍政権がバックアップしても、5年が経過しようとしている現在、未だ元の安全な環境には戻っていません。何年経ったら安全な環境が取り戻せるのか、その見通しさえ国民にわかるような説明はありません。「消せない火はつけるべきではない」という思いがします。

「核の脅威」は解決していません。ですが、核物質を核分裂させない、つまり「消せない火はつけない」というわずかな注意で、核の脅威は相当減らすことができるのです。

「火を使うな」、「電気を使うな」というつもりはありません。火を使うことも電気を使うこともいいのですが、欲望の飽くなき追求は、ほんの少し捨ててほしいのです。「経済性」や「利便性」を少しだけ捨てなければならないのです。

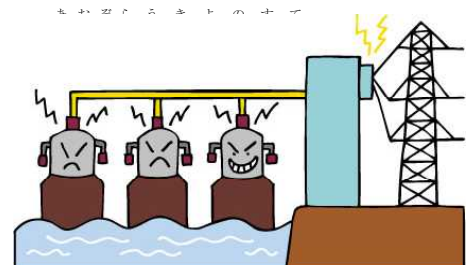
「消せない火はつけない」、「人間が始末できない物質や道具は使わない」という鉄則を守っていかなければならないのです。

そうすることによって、人類滅亡、地球壊滅という極限の不幸を回避できるのです。人間の手に負えない原発など使わなくても、水力発電、火力発電、太陽光発電、風力発電、波力発電等々、人間の力でもコントロールできる発電は可能です。

人間がコントロールできる範囲の電気やエネルギーを使うことにし、人間がコントロールできない電気はやめ、少し欲を捨てて「火をつけない」ことにし、人類、地球を守るべきです。

原発は コントロールできぬ 鉄人28号

平成23年5月18日



『新・憲法の心』第19巻 戦争の放棄（その19）

『国民主権 カウンター・デモクラシー』

「カウンター・デモクラシー」という言葉があるそうです。私の知識の範囲内で、どんな意味があるのだろうかと考えてみました。「カウンター」という言葉で思い出すのは、ボクシングなどで相手の攻撃を交わしながら素早く打撃を加える「カウンターブロー」のことを「カウンター」と呼んでいるとか、飲食店や銀行などで従業員が客の応対に用いる細長い台を「カウンター」と呼んでいることなどです。ですから、直接対峙^{たいし}、つまり、直接向かい合うということかなと考えています。「デモクラシー」は「民主主義」、「民主政治」ですから、それらを合わせると「カウンター・デモクラシー」という言葉になり、「国民が政権と直接向かい合う民主政治」ということになるのかなと考えています。

今国会における安全保障関連法案（以下、「安保関連法案」と言います）の成立経過を見ていると、国民が選挙で選んだ国会議員は国民の思いを無視しています。国民が選んだ国会議員が国の進むべき方向を決めたりする民主主義を「間接民主主義」と呼んでいますが、間接民主主義の限界を今回ほど思い知らされたことはありませんでした。間接民主主義を補足するためには、「カウンター・デモクラシー」が不可欠だと思うようになりました。重要な部分においては、国民が直接政権と向かい合うことが不可欠だと思うに至りました。

国民の声を選挙以外の手段で訴えていかなければならないのです。例えばデモ、市民団体活動、メディア、著書、講演 etc.です。

私は、今回の安保関連法案は絶対に廃止すべきだと考えています。この「カウンター・デモクラシー」は、そのためには有用な方法だと思います。当面、「カウンター・デモクラシー」を粘り強く続けなければなりません。

ですが、間接民主主義は憲法がその前文で「**日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し**」と冒頭に掲げていますので、これを無視するわけには参りません。「カウンター・デモクラシー」を活用しながら、次の選挙では「今国会で安保関連法案を数の暴力で押し通した国会議員には投票しない」という運動をしなければなりません。

その結果、国会議員の構成が変わり、今国会で成立した「戦争法案」とも言うべき安保関連法案を廃止する法案を通すことができます。

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」の例え通り、「次の選挙までには国民の怒りは収まっているだろう」と安倍政権及びそれに与する国会議員は考えているのですが、私達国民は安倍政権とこれに与した国会議員のことは決して忘れません。そのためにも、「カウンター・デモクラシー」であるデモ、市民団体活動、メディア、著書、講演などで安保関連法案の廃止を訴え続けなければならないのです。そして、次の選挙で安倍政権をひっくり返し、国会で安保関連法案を廃止しなければなりません。国民主権です。国民はそれができるのです。

そんな思いを込めて、『新・憲法の心 第19巻』では、『国民主権 カウンター・デモクラシー』を『戦争の放棄（その19）』として書いてみたいと考えています。

